

リレー随筆

大相撲は群雄割拠の戦国時代～若隆景を横綱にする会～

総合病院 鹿児島生協病院 川口 大輔

こんにちは。2021年4月より総合病院鹿児島生協病院で初期研修医を開始しました川口大輔と申します。簡単な自己紹介を記すこととしましょう。1994年に鹿児島市ののぼり産婦人科で生まれ、3歳まで母方の実家である出水市高尾野町でのんびりと人生の最初の時間を過ごす。4歳から鹿児島市の現在の家で暮らしはじめ、玉里善き牧舎幼稚園 伊敷台小中学校 ラ・サール高校 2年の浪人 鹿児島大学医学部 初期研修医と現在に至る。

医者になったきっかけを良く聞かれるわけですが、多くの方が「人の命を救う仕事がしたかった」「家族が入院して、担当してくださった医師にあこがれた」「実家が医者だから」とカッコいい理由があるのにもかかわらず、私は「受験の成り行き」で医者になってしまった、としかいいようがないのが非常に残念である。理系でありながら日本史が非常に得意だったため、2浪目で早稲田の文学部に合格した時点で「大学に入ったらひたすら日本史を極めるぞ！」と思っていた矢先、予備校の勧めでとりあえず出願していた鹿児島大学医学部に合格してしまい、そのまま現在にいたるのである。最初は医者になるイメージが全くなく、後悔しかしていなかった私であったが、臨床実習や初期研修を通して医者になってよかったですとつくづく思うようになった。医者の魅力は、医者でなければ会うことのなかった人々とお話しし、治療方針を考え治療し、笑顔で退院するというオイシイところを味わえるところだろうか。予備校1番の日本史オタクが今では外科の世界に魅了されて

いるのは今思えば面白い変わりようだと思う。

さて今回ご縁があり、鹿児島市医報のリレー随筆を担当することとなったのだが、安請け合いをしてしまったことを後悔している。高々1ページくらいだろうから800字程度の文章で十分であろう、ギリギリで書けば大丈夫であろうと思っていた矢先、提示された条件が「6,000字以内（図・表・写真を含む）」である。しまった。

完全に私の勘違い、思い込みであった。期限ギリギリまで先延ばしにしていたことを後悔しつつ今こうして執筆している。編集委員長の帆北修一先生には後でひっそりと謝罪の言葉を述べなければならない。

ここまでで718字であるから、あと5,282字分執筆しなければならない。だがそれに足りる真面目な内容が思いつかず今までのリレー随筆を見返したところ、なんてことはない。みんな好き好きに自分の興味の範疇のことを書いているではないか。だがそれが難しい。私の趣味は総じて極端で、読者ウケしない。クラシックカー、相撲観戦、日本史、建築、世界の貨幣集め、映画鑑賞などである。このうち映画については、すでに私の先輩にあたる奄美中央病院の平元先生がネタにして書いている以上、二番煎じは読み手を飽き飽きさせるであろう。クラシックカーを語ろうにも、SUVやミニバンがカッコいいとされているこの時代に、JAGUARのXJ40（セダン）やRolls RoyceのSilver spur（セダン）の魅力を語るのは非常にばかげている。日本史、建築、

世界の貨幣集めはもっての他だ。というわけで、やむを得ず、消去法的に現代の大相撲について観戦歴24年の私の見解をからめながら考えていこうと思う。

私が大相撲を見始めた24年前（1998年）は今以上に相撲人気が高かった時代だったようと思える。98年5月場所後に若貴兄弟のお兄ちゃんこと3代目若乃花が横綱昇進して、史上初の兄弟横綱が誕生したわけである。曙、貴乃花、若乃花、それから武藏丸、栃東、武双山、千代大海、魁皇、琴錦、土佐ノ海、出島、若の里、安芸ノ島……今となっては全員引退してしまったが、懐かしい面々が土俵をにぎわせていた。初めての生での大相撲観戦は99年の初場所で、子供ながら千代大海の虜であったようである。もっとも、「ちよたいかい」ではなく「ちよおおうみ」と呼んでいたらしいが。“じいちゃん子”だった私は、祖父から直々に相撲の英才教育を受けてきた。相撲のしこ名のおかげで漢字は読めるようになったし、配布される紙番付表を絵本の代わりに読んでいた。そんな調子で今も相撲オタクとして過ごしている。私の幼少時代は相撲を抜きにして語ることはできない。さて、この5年で大相撲は大きく変わってしまった。2017年1月場所で大関稀勢の里（当時）が悲願の初優勝を決めて横綱に昇進し、相撲界はここ数十年で最も充実した。翌3月場所は白鵬（69代）、日馬富士（70代）、鶴竜（71代）、稀勢の里（72代）の4横綱時代の幕開けであり、大関も豪栄道、照ノ富士（のち73代横綱）、関脇ものちに2回幕内最高優勝を決める玉鷲、のちに大関昇進する高安、そして関脇に転落し大関復帰を見据えている琴奨菊がいた。この時代は横綱大関以外の優勝は非常に難しく、ましてや現在の大相撲のように平幕力士の初優勝がポンポン出るような状況ではなかった。つまらないといえばつまらなかつたが、土俵

は最も充実していたよき時代であった。ところがどうしたものか、2022年現在はそれとは対照的に横綱大関陣の黒星が目立つ。照ノ富士は膝の負傷で途中休場。おそらく九州場所は休場か、出場するとしても進退を賭けた場所になるであろう。師匠が元横綱旭富士の伊勢ヶ浜親方だけに、進退の動向についても目が離せない。ただ彼は序二段からよく頑張った。一時はモンゴルの怪物、平成の怪物と騒がれていたのにも関わらず、大関時代に優勝一回しただけで、自身の病気や膝の負傷の影響でクンロク、ハチナナ大関と呼ばれていた頃が懐かしい。問題は大関陣。幕内最高優勝3回の実力者で才能豊かな御嶽海があっさりと大関陥落するのは意外であったが、9月場所はカド番で4勝11敗。もう少し大関の意地を見せてもらいたかった、と一言物申しておく。はっきり言えば稽古不足。関脇時代がのびのびとしていい相撲を取っていたのに、大関になってから体の硬さが目立った。正代は序盤の取りこぼしがもはや常態化しており、正代の相撲だけは7日目までは見ないようにしている。なぜか彼は後半戦で星をとりかえしては勝ち越しを決めてカド番を脱出している。これが正代だ、と自分に言い聞かせるようにしている。大変彼には失礼な話なのだが、毎回冷や冷やする取り組みでこちらの寿命が縮みそうになるので、正代の相撲はなるべく生放送では見ないようにするのをここに告白しておこう。貴景勝は少し重くなりすぎた。今は体重187kgとのことだが、体重だけがすべてではないだろう。突き押し相撲で大切なのは、仕切り線からの出だしのスピードである。運動エネルギー（E）=1/2mV²で、運動エネルギーは速度の2乗に比例するわけだから、体重（m）を重くするのではなく、速度（V）を速くすべきである。体重を重くして速度が落ちてしまっていては元も子もない。今の貴景勝の出だしは「突進」というよりも「立ち上

がっている」だけに過ぎない。彼の突き押し相撲は一流だと巷では言われるようだが、観戦歴24年の私から言わせてみれば、千代大海(現 九重親方)や晩年の寺尾(現 鐘山親方)にはるかに及ばない。過去には千代の山(元 九重親方 九重部屋創設者)や曙(東関部屋)もいたが、突き押しだけで生きていくのは難しいのが相撲界とりわけ幕内である。体重を軽くすること、を私は強調して言いたい。

ここまで2,004字であるので、のこり3,996字で次期横綱を予想することとしよう。

私が予想する次期74代横綱は、ずばり若隆景(荒汐部屋)、と言っておこう。若隆景は1994年12月6日に福島県福島市で産声を上げた。祖父が小結・若葉山(時津風部屋・12代 鐘山親方)、父は幕下・若信夫(立田川部屋)、兄は幕下・若隆元と幕内・若元春と相撲一家で育った。2011年3月11日の東日本大震災では一ヶ月間長兄の縁で、荒汐部屋で避難生活を送ったようである。身長183cm体重131kgと現代力士では少数となった「ソップ型」の力士である。2022年3月場所で初優勝の他、技能賞4回の実力は十分であるが、後輩の貴景勝が上り調子で大関に昇進した影響でその活躍が目立たないのが残念である。高校卒業後は東洋大学法学部に進学し、学生相撲で大活躍したのち三段目付け出で大相撲デビューとなった。昔から相撲を見ている自分にとって、最近は大学卒業の力士が増えてきたように思える。学生相撲上位は概ね付け出しデビューから関取の座をすぐに射止められる程の実力を携えているが、横綱まで昇進した例としては、「黄金の左腕」の異名をもつ第54代横綱の輪島ぐらいしかいない。輪島がいたころは、微妙なタイミングで大鵬(48代横綱)と対戦がなく、横綱では北の富士(第52代横綱 九重親方:現NHK大相撲解説北の富士勝昭氏)

や玉の海、琴櫻そして輪島時代を象徴する最大のライバルこと北の湖(第55代横綱 北の湖理事長)というすさまじい強豪がひしめく中での横綱昇進であった。その点では若隆景は現代の相撲界では実績を勘案すればもっとも横綱に近い存在ではないだろうか?そのためにはまずは大関に昇進しなければならない。2022年3月場所で12勝のあとは9勝、8勝と関脇の地位でなんとか勝ち越したが、9月場所では11勝。当然、直近3場所33勝が昇進条件であるため、早くも来年1月場所に大関昇進が決まるだろう。次は11勝とは言わずに優勝、それも全勝優勝を目指してほしい。

ここまで若隆景を推す理由としては、同じ平成6年生まれだからであろう。平成6年生まれの有名人としては大谷翔平や高木美保などのスポーツ選手がいる。同じ平成6年生まれとして、まったく違うフィールドであるが活躍していることは自分のことのようにうれしい。若隆景が今後絶対王者になるための条件としては、相撲の型を身に着けることであろう。型というのは単に得意な体勢、得意な戦法という意味ではなく、「この技なら絶対に勝てる。取りこぼさない」という伝家の宝刀の意味合いを持つ。例を挙げるならば、九州が相撲界に誇る名大関こと魁皇(現 浅香山親方)の「左の上手」である。彼の左上手をしのぎ切った力士が全盛期の貴乃花を除けばほとんどおらず、魁皇が左上手を取った瞬間に会場が大きく沸き立ったのが懐かしい。もっとも魁皇の左上手は凶器そのもので、100kg以上と言われる握力に加えて柔道で培った腕力もあり、左の上手や左の小手投げで負傷した力士も数多い(玉乃島など)。2004年の成績であれば横綱になれると思っていたのだが、とうとう彼は綱を張ることはなかった。魁皇のカッコよさに幼少の自分はあこがれたものである。もし自分に息子が生まれたならば、

間違いなく「魁皇」と名付けるであろう。嫁に反対されない限りではあるが。さて話がそれてしまった。現状の若隆景の体格で言えば、千代の富士（第58代横綱 元九重親方）やその兄弟子の北の富士のような速攻相撲を売りにしたらどうだろうか？幕内力士の平均体重が150kgを超えた現代では元大関霧島（現 陸奥親方）や元大関把瑠都のような豪快なつり出しはまず無理だ。消去法で仕切り線からの速攻相撲で上手を取り、おっつけて相手力士を土俵の外へ葬る戦法が最も彼にあっている。最近で言えば日馬富士の相撲だろうか。

さて後2,550字もある。残りはタイトル通り「若隆景を横綱にする会」の説明をしよう。

大体において相撲界で「　　を大関ないしは横綱にする会」と言っているのは、解説の北の富士勝昭氏か舞の海秀平氏であるが、私も同じ気持ちである。相撲の難しいところは、体格差だけでは勝てないところ 競技の特性上、負傷がつきもので毎日が心技体一致しているとは限らないところ 完全実力制のため、休場したらその分番付が下がるか、横綱であれば引退を考えざるをえないところ、にあろう。それが角界の残酷であり、面白さでもあるのだが。さて若隆景も私と同じ28歳になろうとしている。角界での28歳は心技体がもっとも充実するはずの歳である。若隆景よ、大関横綱になるのは今のうちだ。コロナが終息した後の相撲界の英雄になってほしい。

ところで、「若隆景を横綱にする会」は当然のことながら非公認団体である。若隆景を応援するならば、荒汐部屋の後援会に所属するとよい。現師匠は元前頭の蒼国来である。彼もまた異国之地（中国・内モンゴル自治区赤峰市バイリン右旗）から19歳で初土俵を踏んだ。途中2011年の大相撲八百長問題で八百長に関与した疑惑で相撲界を解雇されたのち、

裁判訴訟を経て2年後に大相撲復帰を果たした異色の経験の持ち主である。最高位こそ東前頭2枚目だが、その精神力・土俵歴は横綱級といつていいのではないだろうか。いい先輩、いい親方に恵まれ、そして3兄弟ときたものだ。荒汐部屋の魅力をたくさん伝えた後で、ここで豆知識をひとつ。荒汐部屋（前師匠の元小結大豊の時代）には角界では珍しい「親方」がいたことをご存じであろうか。「親方」といっても、決して注意はしないし、もしかすると稽古をみないかもしれない。その名も「三吉親方」「モル親方」「ハチ親方」「ムギ親方」。柴犬が2匹（三吉、ハチ）とネコ二匹（モル、ムギ）と角界では珍しい動物親方である。コロナ前で稽古見学が自由だったころは、動物親方を見に多くの見物客が来たようだ。彼らは今どうしているものとこの執筆中に調べたところ、モルとムギはすでに亡くなつたようである。もしかしたら三吉、ハチも亡くなっているかもしれない。調べたが詳しくはわからなかった。なお、「荒汐部屋のモルとムギ（荒汐部屋著）」「荒汐部屋のすもうねこ：モルとムギと12人の力士たち（荒汐部屋著）」「相撲部屋の幸せな猫たち（荒汐部屋著）」が現在も入手可能である。

さて、相撲の話はここまでにすることとしよう。次回医報第12号は今年最後の医報となる。2022年を締めくくるリレー隨筆を担当するのは、私の後輩でもあり、人生の大先輩である当院初期研修医一年目の泊誠一郎先生にお願いすることとした。彼は私なんかよりも面白い話題を提供することであろう。では私はここで。貴重な執筆の機会を与えてくださいありがとうございました。

次号は、総合病院 鹿児島生協病院 泊誠一郎先生の
ご執筆です。
(編集委員会)